

令和 4 年 5 月 16 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K14792

研究課題名（和文）ヴェネツィアの周辺水域ラグーナと後背地テッラフェルマの地域形成史に関する研究

研究課題名（英文）A study on the History of Territorial Formation in Venice of Laguna and Terraferma

研究代表者

樋渡 彩 (Hiwatashi, Aya)

近畿大学・工学部・講師

研究者番号：90793696

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ヴェネツィア研究において、ヴェネツィア周辺をとりまくラグーナ（潟）に着目した研究は希薄である。本研究では関心の低いラグーナに着目し、従来の研究対象の領域を広げてきた。これまではラグーナを取り上げても、修道院や軍事施設といった建築単体、あるいは島1つに注目するものばかりだったが、本研究を通して、それらをラグーナ全体から位置付けることをおこなった。マツォルボでは、空間構造を維持しながらも周辺との関係で、発展、衰退してきたことがわかった。各島の形成過程を追いながら、周辺との関係を捉え、ラグーナ全体の空間形成の変遷を考察する必要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

都市周辺に広がるテリトリーオ（地域、領域）の意味を本格的に扱い、地域形成史を論じるという、歴史分野における大きな進展を示すものである。テリトリーオとは、イタリア語で地域を意味する。

こうした河川・運河という水の側からヴェネツィアを歴史的に捉え直し、歴史的に成り立ってきた密接な相互関係に注目した新たな方法で地域形成を読み解くことが、その地域に眠った価値を見出す手法の一つになり得ると確信する。そして、水の側から都市の発展の背景を読み直し、地域性を明らかにすることは、これから水の都市及びその周辺地域を見直す大きな手がかりになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In Venice research, there are few studies focusing on the lagoon surrounding Venice. In this research, we focused on lagoon, which is of little interest, and expanded the area of conventional research. Until now, even if we took up Laguna, we focused only on a single building such as a monastery or military facility, or one island, but through this research, we have positioned them from the entire Laguna. For example, In Mazzorbo, it was found that while maintaining the spatial structure, it developed and declined in relation to the surrounding area. While following the formation process of each island, it was clarified that it is necessary to grasp the relationship with the surroundings and consider the transition of space formation in the entire lagoon.

研究分野：都市史

キーワード：ヴェネツィア ラグーナ テリトリーオ 地域構造 地域形成

1. 研究開始当初の背景

ヴェネツィアを対象とした都市史研究は1980年代から本格的に始まり、海洋都市として空間を据え直し、社会・文化の特徴を探る研究が発展した^{注1)}。東方のビザンツ世界、イスラーム世界との交流によってヴェネツィアがいかに繁栄したかという点に関して論じられ、長らく「海洋都市国家」と位置づけられてきた^{注2)}。しかし、ヴェネツィアの形成と発展の本質を解読するためには、ラグーナ(潟)とテッラフェルマ(本土)との関係についても明らかにする必要がある。

ラグーナについては、1966年のヴェネツィア本島に大被害をもたらしたアックア・アルタ(冠水)をきっかけに、それまでの広大な埋め立てによる開発の在り方を反省し、自然環境を保全する方向に進んでいる。こうした背景から法学や生物学の立場からラグーナ全体の自然環境保護に関する研究が行われ、実践的にも取り組まれている。そして昨年、都市史の視点からラグーナ全体を捉える動きが初めて登場し、共和国時代のラグーナはヴェネツィア本島に食料を供給する場として役割を担っていたという位置づけがなされた^{注3)}。ラグーナ内の島々や自然環境への関心が高まりつつある現在、都市史の立場から、ヴェネツィア本島との関係のなかでラグーナがどのような役割を担ってきたのか、より広い視点から考察することが求められている。

テッラフェルマについては、各地の郷土史的研究の蓄積はなされているが、ヴェネツィアの形成と発展を読み解く視点からテッラフェルマを捉えた総合的な研究はほとんどない。これまで「海洋都市国家」として位置づけられてきたために、後背地がヴェネツィアの繁栄を支えていたという認識が低いのである。そこで応募者は、樋渡彩・法政大学陣内秀信研究室編『ヴェネツィアのテリトリーオ 水の都を支える流域の文化』(鹿島出版会、2016年)のなかで、ヴェネツィアを支えてきた地域としてテッラフェルマを位置づけた。ここでは、ラグーナに注ぐ河川を軸にしながら、ヴェネツィアの都市建設と市民生活を支える地域構造が成り立っていたことを提示した。従来行われてきた都市形成史の範囲を超えて、都市を支えてきた周辺地域(テリトリーオ)を含めるこの考察の方法は、都市史学会や地中海学会などの学会で高い評価を得た。しかし、ヴェネツィアの形成・発展の理解をさらに深めるためには、上記の書籍で取りあげた3本の河川に加えてバッキリオーネ川などほかの河川流域も検証する必要がある。また同書では、ヴェネツィア共和国時代を中心に扱ったため、今後は時間軸方向を伸ばし、共和国崩壊(1797年)以降から現在にも目を向けながら地域形成の変容を考察しなければならない。

こうした研究の蓄積を踏まえ、特徴的な水都が誕生、成立、繁栄できた真の理由、背景を考察し、地域形成論の構築を試みる。この水の側から地域形成のメカニズムを読み取る視点は、都市史研究に新たな領域を切り開くとともに、日本における実践的な都市づくり、地域づくりにとっても有効な一つになり得ると考えられる。

注1) D. Calabi, P. Morachiello, Rialto: le fabbriche e il ponte, 1514-1591, Torino, 1987 や、陣内秀信『イタリア海洋都市の精神』(興亡の世界史第8巻)講談社、2008年などが挙げられる。

注2) E. コンチナが1990年に、建築大学の中に「ビザンツ・アラブ・トルコ都市研究センター」を創設し、教育や研究の分野でもイスラームやアラブ都市への関心を高めた。E. Concina, U. Camerino, D. Calabi, La città degli ebrei: il ghetto di Venezia: architettura e urbanistica, Venezia, 1991 は代表著書である。

注3) D. Calabi, L. Galeazzo, Acqua e cibo a Venezia: storie della laguna e della città, Venezia, 2015.

2. 研究の目的

ヴェネツィア及びその周辺地域を対象として、河川や運河と密接に結びついて形成された地域の在り方を解き明かそうとするものである。ラグーナ(潟)及びテッラフェルマ(本土)からヴェネツィア周辺に注ぐ河川流域に着目し、それぞれの地域とヴェネツィアとの関係を浮かび上がらせることを目的とする。また、特徴的な水都が誕生、成立、繁栄できた真の理由、背景を考察し、地域形成論の構築を試みる。この水の側から地域形成のメカニズムを読み取る視点は、都市史研究に新たな領域を切り開くとともに、日本のみならず世界の水の都市及びその周辺地域を見直す大きな手がかりになると考えられる。

3. 研究の方法

本研究は研究期間内に二つの大きな空間領域、(1)ラグーナ全体、(2)テッラフェルマからヴェネツィア周辺に注ぐ河川・運河の流域について、ヴェネツィア共和国時代から現在までの変遷を追

うことで、ヴェネツィアとの関係中でどのように地域が形成され、発展してきたかを総合的に把握し追求する。

(1) ラグーナ全体

ラグーナがいかに水都ヴェネツィアの成立・発展にとって重要な役割を果たしてきたかを様々な視点から解明する。

(2) テッラフェルマからヴェネツィア周辺に注ぐ河川・運河の流域

ピアールヴェ川、シーレ川、プレントラ川に加えてバッキリオネ川の流域を対象とし、ヴェネツィア共和国時代から現在までの地域形成過程を考察する。これまで個々に蓄積された研究を、河川や運河といった水の視点から据え直し、ヴェネツィアとの関係を考察しながら地域形成の過程を明らかにする。

4. 研究成果

(1) ラグーナ全体

12世紀から現在までの地図を収集し、変化の過程を読み解いた。とくに、19世紀初頭の地図から共和国崩壊直後の状態を読み解くことができ、当時の空間構造を明らかにした。

具体的には、居住地の立地から類型を考察し、次のように分類することができた。

- ① ラグーナの境界の本土側に位置する居住地：河川沿いに建物が並ぶタイプ、運河沿いに建物が並ぶタイプ、バレーナに面するタイプに分類した。
- ② ラグーナの境界のラグーナ側に位置する居住地：カヴァッリーノなどを挙げ考察している。
- ③ 高密な居住地：ヴェネツィア本島、キオツジャ、ブラーノ、ムラーノを取り上げている。そして、マッツォルボとトルチェッロの類似性を述べた。リオ・ピッコロのような低密な居住地についても触れている。
- ④ 修道院だけの島：島1つを修道院が所有しているタイプである。検疫施設として利用されていた島もこのタイプに分類し、ラグーナの島々の役割を描きだした。
- ⑤ 要塞の島
- ⑥ 伝統的な住宅「カゾーネ」のみの島
- ⑦ アドリア海側の島
- ⑧ そのほかラグーナの土地利用

また、マッツォルボの変遷を考察することで、本土のアルティーノ、ラグーナの中心であるヴェネツィア、そして隣のトルチェッロやブラーノとの関係のなかで発展してきたことを推測することができた。空間構造を維持しながらも周辺との関係で、発展、衰退してきたことを明らかにした。この研究を通して、各島の形成過程を追いながら、周辺との関係を捉え、ラグーナ全体の空間形成の変遷を考察する必要性を浮かび上がらせた。

ラグーナの特徴的な風景を作り出している養魚場や農場、修道院、軍事施設など本研究では取り上げられなかった場所に関する歴史や現状把握については、今後の課題とする。

(2) テッラフェルマからヴェネツィア周辺に注ぐ河川・運河の流域

18世紀末のアントン・フォン・ザック作成の地図から土地利用を把握した。ヴェネト州の山側には水車が多く立地視していることが確認できた。本研究では、バッキリオネ川の流域を重点的に調査した。また、アディジェ川にも水車が多く位置していることがわかり、これらの場所には様々な産業が成立していたと推測される。アディジェ川流域の地域構造については、今後の課題とする。

研究成果は以下の通りである。

1. 大谷瑛史、**橘渡彩**「ヴェネツィア・ラグーナにおける都市および集落の空間構造に関する考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』42巻、日本建築学会中国支部、2019年、pp.939-942
2. 大谷瑛史、**橘渡彩**「ブラーノにおける街路の特徴に関する考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)』日本建築学会、2019年7月、pp.911-912
3. 小林史弥、**橘渡彩**「バッキリオネ川流域における都市構造の考察 エステ、モンシエリチェを事例としてエステ、モンシエリチェを事例として」『日本建築学会中国支部研究報告集』43巻、日本建築学会中国支部、2020年3月、pp.971-974
4. 系原健太郎、**橘渡彩**「16世紀ヴィチエンツァの都市構造に関する考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』43巻、日本建築学会中国支部、2020年3月、pp.975-978
5. 吉田拓海、**橘渡彩**「エウガネイ丘陵地域におけるテルメ考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』43巻、日本建築学会中国支部、2020年3月、pp.979-982
6. **橘渡彩**「ラグーナ・ヴェネタにおける居住地の変遷に関する考察 トルチェッロを事例として」『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』日本建築学会、2020年、pp.705-706

7. **樋渡彩**「水都ヴェネツィアの再生：ラグーナの過去・現在・未来（特集 イタリアに学ぶ、豊かさ）」『都市計画』都市計画学会、2020年、pp.70-73
8. **樋渡彩**「ヴェネツィア・ラグーナにおける18世紀末の空間構造に関する考察」『日本建築学会関東支部研究報告集』第91巻、日本建築学会、2021年3月、pp.561-564
9. 田村正義、**樋渡彩**「古代バッキリオーネ川流域における居住地の位置に関する考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』44巻、2021年3月、pp.845-848
10. 小野樹、**樋渡彩**「小都市エステにおけるポルティコの形状に関する歴史的考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』44巻、2021年3月、pp.849-852
11. 河村陸、**樋渡彩**「ピアーヴェ川流域における集落の立地に関する歴史的考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』44巻、日本建築学会中国支部、2021年3月、pp.853-856
12. **樋渡彩**「マツォルボにおける空間構造に関する歴史的考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』日本建築学会、2021年7月、pp.551-552

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 樋渡彩	4. 巻 2021
2. 論文標題 マツォルボにおける空間構造に関する歴史的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）	6. 最初と最後の頁 551-552
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 樋渡彩	4. 巻 91
2. 論文標題 ヴェネツィア・ラグーナにおける18世紀末の空間構造に関する考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2020年度日本建築学会関東支部研究報告集	6. 最初と最後の頁 561-564
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 樋渡彩	4. 巻 2020
2. 論文標題 ラグーナ・ヴェネタにおける居住地の変遷に関する考察 トルチェッロを事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2020年度大会（関東）学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 705-706
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 樋渡彩	4. 巻 69
2. 論文標題 水都ヴェネツィアの再生：ラグーナの過去・現在・未来（特集 イタリアに学ぶ、豊かさ）--（地域の価値づけと活性化）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 70-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田村 正義, 樋渡 彩	4. 巻 44
2. 論文標題 古代バッキリオーネ河流域における居住地の位置に関する考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会中国支部研究報告集	6. 最初と最後の頁 845 - 848
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野 樹, 樋渡 彩	4. 巻 44
2. 論文標題 小都市エステにおけるパルティコの形状に関する歴史的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会中国支部研究報告集	6. 最初と最後の頁 849 - 852
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 糸原健太郎, 樋渡彩
2. 発表標題 16世紀ヴィチエンツアの都市構造に関する考察
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林史弥, 樋渡彩
2. 発表標題 バッキリオーネ河流域における都市構造の考察 エステ、モンシェリチェを事例として
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田拓海、樋渡彩
2. 発表標題 エウガネイ丘陵地域におけるテルメ考察 準
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大谷瑛史、樋渡彩
2. 発表標題 プラーノにおける街路の特徴に関する考察
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関